

所沢特別支援学校 支援部だより No.2・3合併号



令和4年度 第2回 オンライン特別支援教育公開講座 開催報告

「情緒不安定な愛着発達上の課題がある子どもに対して、教育・療育現場ができること
～情動の広がりと言葉の発達の関係」と「ネガティブ・ケイパビリティ～」

講師：大橋 良枝 先生(聖学院大学心理福祉学部教授・公認心理師・
臨床心理士・本校特別非常勤講師)



第2回公開講座のご報告です。校内職員には夏季休業中に開催し、外部申込みの方向けには、10月中にオンラインで配信しました。

本校が大橋先生からご助言をいただくようになってから、もう10年以上になります。その過程で、大橋先生は、情緒不安定で指導が困難な子どもを「チームで支援する体制」のモデルを考案されました。今回の公開講座では、この10年間をとおして本校職員にアドバイスをいただいていた内容を約2時間にギュッと凝縮されたご講義でした。

外部視聴者数は102名となり、大勢の関係の皆様視聴していただくことができました。ご覧になってくださった皆様、ありがとうございました。



研修内容

大橋先生より3部構成で約2時間のご講義をしていただきました。

1. 愛着障害モデルとは

「精神医学」と「発達心理学」それぞれの愛着理論と愛着障害の概念の系譜についてのお話でした。二つの系譜では、たどり着いた愛着・アタッチメントの問題に関する際立った違いがあるという、興味深い内容でした。「アタッチメントの相互作用」と「アタッチメントと精神衛生上の問題」について、フロチャートを使ってわかりやすく説明していただきました。そして、これまで本講座で何度もお話していただいた「投影性同一化」と「EMADIS(愛着障害児対応教育モデル)」についても、あらためて事例を交えながら、丁寧に教えていただきました。

2. 子どもと大人の「二人ぼっち」を促進するもの：「スケープゴート」について

「スケープゴート」とは、端的に言うと、一人の先生に任せきりになってしまう構造のことです。集団があれば、必ずスケープゴートは起きるそうです。その中には、※「悪気のないスケープゴート」もあるということ、事例を踏まえてお話していただきました。そして、スケープゴートが起こったときに重要なことは、傍観者(周りの人)と集団全体の風土に働きかけることというお話でした。

3. 必要な態度

「ネガティブ・ケイパビリティ」とは、「わからない」「難しい」の中にあることです。私たち大人は、常日頃から「子どものことを分かってほしい」としてしまい、「子どもが分からない」ことが不安になってしまいます。しかし、この「不安」から自由になった大人は、上手に指導や支援ができるのでは、というお話がありました。私たち大人が子どもと関わる中で、理解しようとしているけれど子どもの言動が理解できない、しかも、子どもは日々変化していきます。そこで、試行錯誤しながら、そのことを楽しみながら繰り返せることが大切というお話がありました。最後に「共感」とはどういう態度なのか?ということを知りやすくお話していただきました。

参加者の感想

(参加者アンケートより一部抜粋)

- 「ネガティブケイパリティ」という言葉を初めて聞きました。子どもの問題行動について、いつも分からないことが多く、迷いながら試行錯誤ばかりしているので、それでよいといわれたようで、安心した気分になりました。分からないことを楽しみながら、理解し続けるという気持ちを持ち続けるよう、努めたいと思います。
- これまでの「愛着」の捉え方が変わり、安心させてほしい、不安を取り除いてほしいというのは、目から鱗でした。また、そのために「投影性同一化」理論が役立つことも大きな学びでした。「夢想」し続けることができるよう、職場内にスケープゴートがいらないかを改めて見直し、スタッフみんなで、日々子どもたちを理解しようと努めていきたいと思います。
- 3本柱について、大橋先生の言葉で私たちにわかりやすく(解釈)説明して頂きありがとうございました。教員間で生じる仲間はずれ(自分にあてはまらない)は本当にあるなと思いました。気持ちを(理解)きいてくれる人、近くに来てくれる同僚がいるだけで教員も安心します。同情と共感についても、まわりの人の説明、話がしやすい内容でした。他にもいろいろと、この短い時間(講座)の中で内容が詰まったお話でした。

《大橋良枝先生の書籍ご紹介》

「愛着障害児とのつきあい方」金剛出版・大橋良枝著



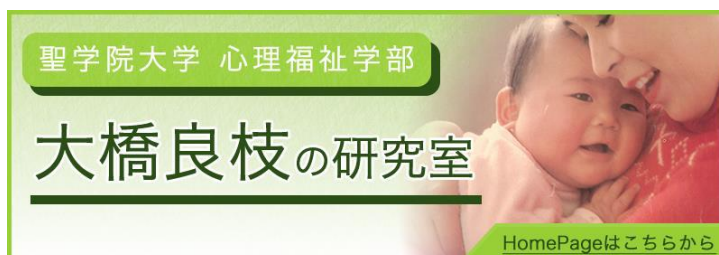
内容(「BOOK」データベースより)

「愛着障害」という言葉が、その子どもに適切な環境を与えるためにあるのではなく、その子どもにかかわることに対して防衛的に使われたり、「手がかかる」子どもというレッテルを強化するために使われるようなことがあれば、それは最も避けたいことである。本書では、知的障害特別支援学校の現場で増えつつある愛着の問題を抱える子どもたちと、その子どもたちへの対応に苦慮する教師への介入を試みた著者が、精神分析的な理論や著者自らが作り上げた愛着障害児対応教育モデル(EMADIS)仮説を用いて当事者関係の悪循環を断ち切る方途を探る。具体的な事例を通して描き出される子どもたちと教師たちが変化していくプロセスは、集団力動が働くあらゆる場面においても共通するものとして、臨床心理学的な介入を行う上で大いに参考になるであろう。

《大橋良枝先生のホームページのご紹介》

聖学院大学 大橋良枝先生の研究室ホームページはこちらです。

<https://ohashi-lab.com/>





令和4年度 第3回 特別支援教育公開講座 開催報告

「子どもの発達(太田ステージ)を学び、「心の世界」に合わせた指導・支援を考える」

講師：亀井 真由美 先生(東京都立東大和療育センター公認心理師・臨床心理士)

第3回の講座は、3年ぶりに外部参加者の皆様も本校にお越しいただき、対面での開催となりました。

前半は、亀井先生より「子どもの発達」「発達段階別の子どもの世界」についてのご講義を凝縮してお話していただきました。

後半は、本校の職員と外部参加者が久しぶりに交流できる機会であることも活かし、5~6人ほどのグループを作り、「教材教具を発達段階別にどう使うか？」についてのグループワークを行いました。

一つの教材の使い方・提示の仕方によって、さまざまな発達段階の子どもに使うことができるということをグループで意見交換しながら深めることができました。経験豊富な先生の意見や想像力を膨らましてアイデアを出している若手の先生の意見など、グループで一つの教材について話し合い、8グループ8種類の教材について発表しました。

久しぶりの対面研修ということもあり、あらためて指導者・支援者同士が顔を合わせて話し合うという機会は貴重だと感じられる講座となりました。



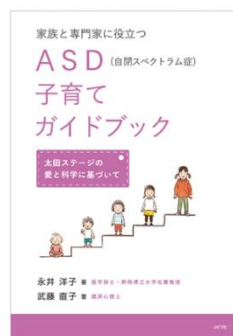
参加者の感想

(参加者アンケートより一部抜粋)

- 前半、理論を学び、後半、応用としてのグループワークという流れで、より実践的に太田ステージの発達段階とアプローチについて学ぶことができました。 実際具体的な教材を使ってのワークで色々発想と知り、アイデアをもらうことができた。
- 太田ステージがねらいとしていることや、各発達段階の特徴について知ることができました。グループワークでは、様々な教具について、どのステージの子どもにも使い方したいで有効な教材になることが分かり勉強になりました。
- “子どもの内面世界を知る”この言葉が心に残りました。内面を知る事で適切な関わり方を考えることができ、一人ひとりに合った支援ができると改めて考えさせられました。グループワークで様々な意見を聞け、とても勉強になりました。
- 今日の講演を受けて、太田ステージが意味する2つのことから知ることができ、本校の課題の根底から理解することができました。また、子どもの姿、具体的な行動をイメージしながらお話を聞くことができ、分かりやすかったです。1つの教材を共有していろいろな段階で、いろいろな使い方ができるという レポートリーが聞いて勉強になりました。

《太田ステージ関連書籍ご紹介》

「家族と専門家に役立つ ASD 子育てガイドブック」ぶどう社
永井洋子・武藤直子著



「発達支援と教材教具 I~IV」ジ
アース教育新社・立松英子著

